

見ゆるものにあらず

青山 加奈 (1987年英文卒)

没後350年を経てその名誉が回復されたというガリレオの地動説のように、まちがっているように見えることが正しいこともあれば、筋がとおっているようでいていないこともある、そんなことを学んだのが、チャペルアワーでの礼拝でした。人生をうまく渡っていくためのマニュアル本や受験参考書が急に色褪せてみえました。

入学当初は孤独が募り、チャペルアワーに熱心に通っていました。そこでいつも出会う一つか二つ年上の先輩と友だちになりました。彼女はいつも同じ場所にすわっていました。目が病気のためにあまり見えていないようで、身体もしんどそうでした。それでも人の役にたちたいと福祉の勉強をされていました。ある日、彼女から「私が書いたの」と手渡された分厚い信仰告白の冊子のタイトルは『見ゆるものにあらず』。「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます」（コリント第二4・17）からきていました。そこには裏切られたと思っていた自分の人生に立ち向かう決意をさせてくれた神への感謝がささげられていました。それを読んだとき、自分が信じていた価値観の転倒に衝撃を受けたのを覚えています。そのときまで私は人というものにも、神にもたかを括っていたのでした。しかし、次第に都会の刺激に心を奪われていった私はチャペルアワーに行かなくなりました。

あれから長い歳月がすぎました。でも時にみる夢の中の私は広島から都会に出たばかりのあか抜けな学生で、明学の門をくぐり、右手にあるテニスコートでボールを追って駆けている学生たちを見たあと、少し先にある左手のチャペルの中へ字引と聖書を重そうに抱えて入って行きます。やり残していることや後悔がたくさんあるからでしょうか。そこでキリストのように私を待っているのはあの地味な身なりをした悲しげな彼女。先日もふと、あの「みゆるものにあらず」のあるコリント第二の手紙を開いたとき、そのわずか数章前で、彼女に出会いました。「人に知られていないようでもよく知られ、死にそうでも見よ、生きており、罰せられているようでも殺されず、哀しんでいるようでもいつも喜んでおり、貧しいようでも多くの人を富ませ、何ももたないようでもすべてのものを持っています。」（コリント第二6・9-10）